

「わたしについて来なさい」

マルコ 1:16-20

平吹光太 22.01.30

本日開かれています箇所の前には、主を信じて従う証としてバプテスマを受けることが勧められ、イエス様も受けられたことが記されている。主を受け入れ従う決心をしてバプテスマを受けた者は、それで終わりではなく、主の弟子となることが今日の箇所で書かれている。どのように主の弟子になり、主の弟子とは何なのかを主のみことばから共に教えられたい。

I. 私たちを先に愛し、目を留めておられるお方

「イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。」(16節) 今日のお話はイスラエルの北にあるガリラヤ湖での出来事。ガリラヤ湖の面積は支笏湖の約2倍。ガリラヤ湖の特徴は、水面が海よりも約200メートル程低い湖で最も低い淡水湖。この湖には魚が多くいて、漁業が盛んだった。ガリラヤ湖の周りには沢山の町があり、人々によって食されていた。そのようなガリラヤ湖のほとりをイエス様が通られた時のお話。イエス様は2人の兄弟シモンとアンデレをご覧になられた。シモンは後にペテロと呼ばれる人で、アンデレはその兄弟。彼らは特別な人ではなく、ごく普通の漁師。その2人にイエス様は目を留められた。ここで私たちが覚えたいことは、神がありのままの私たちに目を留めておられるということ。何かができる、できないではなく私たち一人ひとりの存在を愛し、私たちが生まれる前から私たちを選び、目を留めておられたということ。数多くある宗教の中から、私たちがイエス様を選んだのではなく、イエス様が私たちを選んでくださった。今日ここに来ることができていることも、神が私たち一人ひとりを招いてくださっているから。

II. 主の似姿に変えられていくことを願う

「イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。』」(17節) イエス様はここで、シモンとアンデレに「わたしについて来なさい」と言い、「わたしについてくる」ということが本当の弟子だと言う。ここで大切な言葉は「わたしに」という言葉。なぜなら私たちには、イエス様ではなく他の魅力ある人についていく弱さがある。しかし、私たちは人ではなく、人を造られた神に従っていくことが最も大切。この「ついて来なさい」という言葉は直訳すると「後に従う」という意味。神は、時には私たちの前に立って導き、倒れそうな時には後ろに立って支え、ある時は背負い、共に歩んでくださるお方。しかし、弟子という立場から考えるなら、私たちはイエス様の後に従うことが大切。(証) イエス様は「わたしの後に従うように」と、シモンとアンデレに言い、彼らに何を望んでいたのか？それは、人間をとる漁師になること。それは、イエス様が、シモンとアンデレに模範を示されたように、他の人にもしていくこと。このことが「人間をとる漁師」ということ。漁師の仕事は、魚をとって殺し、人に提供する。人の肉体を生かすが、魂を変えることはできない。人間をとる漁師は、人に福音を提供し、福音によって人の魂

を死から命へと生かし、弟子となった者が福音を提供し全世界に出ていく。主によって捉えられ福音によって変えられた者は、主の弟子になり、同じように生き、他の人に福音を伝える者とされていく。ではなぜ、イエス様は最初の弟子として漁師である2人を選ばれたのか？イエス様は聖書をよく知る学者を選ばれたのでもなく、権力を持っている偉い人たちを弟子には選ばずに、漁場ならどこにでもいるような普通の漁師を最初の弟子とされた。それは、特別な人だけがイエス様の弟子になれるということではなく、自分の弱さ、罪を自覚させられ、変えられ、救われた者は、誰でもイエス様の弟子とされるということ。自分が師よりも優っている、または同等だと思っているなら、本当の主の弟子ではない。自分には無いもの、足りないものを教え、与え、導いてくれるのが師。自分の弱さを認めて主に拠り頼んでいくのが弟子。弱くても、何か特別なことができなくても、イエス様はそのような私たちを選んでくださった。

III. 主の御思いにすぐに従う

「すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」(18節)「するとすぐに」という表現はマルコの福音書では、何度も出てくる。「するとすぐに」彼らが何をしたのかが大切。彼らがすぐにしたことは、「網を捨てて、イエス様に従った。」ということ。「すぐに従う」という決断が大切。

“今は忙しいから”とか、“やることが溜まっているから”と後回しにするのではなく従う。それがシモンとアンデレの信仰。彼らが捨てたものは何か？それは、「網」であり漁師にとって重要なもの。彼らが「網」を捨てたとは、今まで積み上げてきた経験を捨てて、イエス様に従ったということ。主の弟子とは、今持っている何かを捨て、主に従うべき時がある。(証) イエス様に従って行く時に、捨てなければいけない何かがあれば、シモンとアンデレが「すぐに網を捨てて従った」ように、私たちも後回しではなく、「すぐに捨てて従って」イエス様に従うことが大切。注意してほしいポイント。イエス様を第一とするということは、何でもかんでも捨てるということではない。

(例) それぞれに遣わされている場所で、神の御心を後回しにするのではなく、また御心が自分の思いとは反していたとしても、神の御心に答え、すぐに従って行くということが大切。

IV. 優先順位を常に主に置く

「また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網を繕っていた。イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。」(19-20節) またイエス様はさらに先に進み、ヤコブとヨハネに目を留められた。彼らもまた漁師でしたが、イエス様をご覧になったその時には、漁をせず舟の中で網を繕っていた。網を繕う作業は、破れた所を探しては修理する。大きな網であればある程、大変な仕事。代わり映えしない大変な作業に文句が出そうな時間。そのような日々の生活の繰り返しに慣れきってしまい、“それしかない”とか、“それ以外のことは自分には関係ない”とか、“今の生活のやっていることだけで精一杯”になっていたはず。そのような彼らにイエス様は、目を留められた。それは、神はどんな時も神は私たちに目を注いでおられるということ。

その神に私たちはどのように応答するのか？日々の仕事の忙しさに流されたり、神よりも大切なものを捨てられずに、神を見上げることにできなくなっているようなことが私たちの日常生活の中にはないか？20節では、シモンとアンデレの時と同じように、イエス様は、ヤコブとヨハネを呼ばれた。彼らは父と雇い人たちを舟に残して、イエス様に従った。このようにイエス様の弟子となった4人に共通する点がある。それは彼らの生活の優先順位を一番を、イエス様にしたこと。(例話) 今日登場した4人の優先順位は、イエス様に会う前には、仕事、両親、友人を一番大事にしていたかもしれない。もちろんそれらは大事なことです。しかし、4人はイエス様に会い、変えられてからは、イエス様が一番になり、全てを捨てて、イエス様に従った。イエス様を一番にして、従う時、その他のものや事は祝福される。反対に、イエス様を一番にではなく、その他のことを一番にしていくなら祝福は取り去られる。ここで、注意してほしい事は、聖書の別の箇所では、「自分の家の人に敬愛を示して、親の恩に報いることを学ばせなさい」(1テモテ 5:4) という箇所や「もしも親族、特に自分の家族の世話をしない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。」(1テモテ 5:8) というみことばもあるので、その時その時に、主の御心を求めて、歩むというバランスが大切。また、実は今日のこの箇所は弟子たちのように直接献身に導かれる者のことを述べていますが、牧師や宣教師等の直接献身の人と、献身をした世の職業を持って主にお仕えしている人達がいる。今日のみことばの私たちへの適用としては、生活の中で主を第一としていくことができる。

結：今日はイエス様の弟子になった4人を通して教えられた。イエス様が普通の漁師を選ばれたように、私たちも何か優れたところがあったから選ばれたのではない。選びはただ神のあわれみ。高慢な態度ではなく、滅んで当然であった者があわれみ故に救われた者としてへりくだり、主にしてお仕えしていきましょう。また、弱く、日常生活でいっぱいになり、神様を見ることができなくなっている者であったとしても、神は私たち一人ひとりに目を留めておられるということを今日もう一度覚えたい。もう一つのこと、仕事や今までの経験、また親や今まで築いた人間関係を捨て、イエス様を第一にして従った弟子達の姿を見たように、私達も今一度自分自身を点検し、自分の欲を優先するのではなく、イエス様を第一とした歩みをしていきたい。親族や人ではなく、主イエス様を第一とする時、かえって、主の恵みで親族と人々を愛する者に変えられる。私達は生まれる前からイエス様に愛され、目を留められている存在であることに感謝し、「わたしについて来なさい」というイエス様の招きに応答し、従うイエス様の弟子とさせて頂きましょう。